

板橋区立郷土資料館所蔵の石田収蔵資料に 含まれていた吉田巖関連資料について

A Report of the Iwao Yoshida's Collections
in the Syuzo Ishida's Collections of Itabashi Historical Museum

小西 雅徳^{※1}・内田 祐一^{※2}

Masanori KONISHI and Yuichi UCHIDA

はじめに

平成12(2000)年冬、東京にある板橋区立郷土資料館では、『石田収蔵一謎の人類学者の生涯と板橋』と題した特別展を開催した。この展示は、板橋区徳丸に居住していた北方民族及び人類学の研究者、石田収蔵が残した資料を中心に、彼の業績を紹介したものである。

この石田が残した資料の中に、福島県出身で胆振や日高、十勝において、教員の傍らアイヌ文化の調査研究をおこない、その後、帯広在住のアイヌ研究家として知られた吉田巖の未発表原稿等が含まれていた。展示会では、この吉田資料を出品せず、かろうじて図録のリスト上での記載のみであった。そこで、今回、この紙面を借りて紹介するものである。

1. 石田収蔵の経歴

石田収蔵は、明治時代後半から昭和時代戦前にかけて活躍した人類学者である。特に北海道及び南樺太(サハリン南部)における北方民族研究で、度々その名を管見するものの、早期の段階で彼自身執筆活動を停止したため、斯界での石田収蔵は、長い間謎の人物とされていた。

石田収蔵は、明治12(1879)年3月1日、秋田県鹿角郡柴内村(現、秋田県鹿角市花輪字柴内)に父石田実継、母キヨの四男として生まれた。その後、父の死により青森県八戸へ家族共々移り住み、明治34(1901)年、東京帝国大学理科大学動物学科に入学した。同38(1905)年には、大学院へ進学する過程で人類学へと転向し、坪井正五郎に師事する。人類学教室に在籍中から、東京人類学会の幹事等を勤め、月刊誌「東京人類学会雑誌」の編集も担当している。

大正9(1920)年には、東京の郊外に位置する北豊島郡赤塚村徳丸(現、東京都板橋区徳丸)に住まいを構え、昭和15(1940)年1月に石田が亡くなって以降も、家族はそのまま板橋に居住した。しかし、平成の年となると相続者が相次いで亡くなったため、平成5(1993)年春、家屋解体に伴う立会い調査の結果、板橋区立郷土資料館へ石田収蔵資料が寄贈されたのである。

資料の総数は120件強、約2,000点に及ぶ内容であるが、大半は書簡類を中心とした平モノ資料であり、ダンボール数箱分と若干の生活資料とで構成され、残念ながら北方民族関係に関わる資料はそう多くない。ただ、明治末から大正初期段階における草創期での南樺太野外調査ノート類や覚え書・下原稿には、その時代性から見て重要な内容を含むものがある。また、当時収集した実資料の多くは、東京大学の人類学教室にそのまま置かれ、その後、大阪の国立人類学博物館へ所管替えとなっている。石田の資料は、そうした実資料の背景説明資料としても重要な価値を有しているのである。

※1 板橋区立郷土資料館 学芸員

※2 帯広百年記念館 学芸員

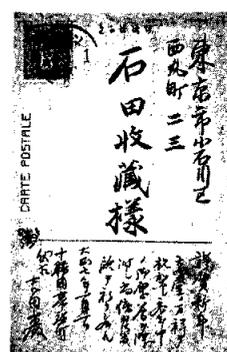
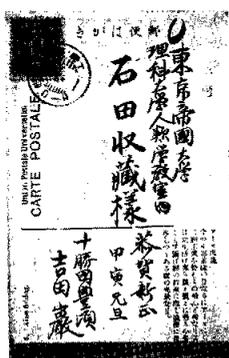
2. 吉田巖とその資料について

吉田巖は明治 15(1882)年、福島県で生まれ、明治 39(1906)年に北海道へ移住する。渡道してからは、音更小学校、芽室の毛根小学校、虻田小学校、平取荷負の小学校などで教鞭をとり、大正 4(1915)年からは庁立伏古第二尋常小学校（後に日新小学校と改称）に勤務し、昭和 6(1931)年までアイヌ子弟の教育にあたった。この間、アイヌ文化の調査研究にも没頭し、アイヌ文化研究者として活躍して多くの論文を残している。小学校退職後も帯広でアイヌ文化や郷土史の調査研究を続け、昭和 25(1950)年には帯広市文化賞、昭和 27(1952)年には北海道文化賞を受賞した。昭和 38(1963)年に逝去している。

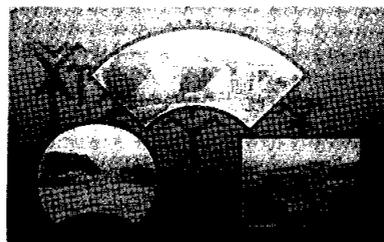
この吉田巖関連資料は年賀状 3 通、未発表原稿 1 通、『北海道戸口表』1 冊、『北海道廳管内学事統計一覧』1 状の 4 種類 6 点からなる。年賀状を除く他の 3 点は、東京市下谷区に下宿していたアイヌの鶴沢為之助の葉書、北海道アイヌ製作模型代価（ノート）、その他アイヌ語メモ 2 枚からなる一群に含まれていたものである。アイヌ関連資料一括としてまとめられていたわけであるが、これが石田自身による分類かは判然としない。少なくとも、時代背景として「大正時代」をグルーピングしてあった。

〈年賀状〉

1 通目は大正 3(1914)年元日の年賀状で、「恭賀新正 甲寅元旦 十勝国豊頃 吉田巖」から東京帝国大学理科大学人類学教室石田収蔵様宛での、アイヌ出漁の絵葉書である。写真部分には「アイヌ風俗四輯六」というキャプションが付いている。2 通目が「恭賀新正 大正五一月一日 十勝國中川郡豊頃村 吉田巖」から東京市小石川区西丸町二十三番地石田収蔵様宛てになっており、絵葉書には小樽の手宮洞窟の原始絵画図と鉄道橋等の写真がある。3 通目は「謹賀新年 高堂ノ万祥ヲ祝賀し 客年中ノ御厚眷ヲ深謝し尚倍旧御愛顧ヲ祈り奉ん 大正七年一月一日 十勝国帯広町伏古 吉田巖」という文面で、裏は「明治天皇を奉祀セル伏古神社（十勝アイヌ創建）」というタイトルの絵葉書の年賀状である。なお、宛先は、「東京市小石川区西丸町二十三番地石田収蔵様」となっている。



大正 3 年の年賀状



大正 5 年の年賀状



大正 7 年の年賀状

〈未発表原稿〉

今回紹介する未発表原稿は、「アイヌの育児に因める説話」というタイトルで、原稿用紙6枚と7枚の付図からなっている。執筆時期は、この原稿の最後の部分に「正誤 本誌第三十二巻第一号アイヌと年頭所感云々……」という追記があり、これが大正6(1917)年1月25日発行の『東京人類学雑誌』に掲載された「アイヌと年頭所感」のことを指しているため、少なくともこの原稿は1月以降の早い段階に執筆されたであろうことが推測されていた。

ところで、吉田巖は詳細な日記を残しており、これによって彼の行動を詳しく知ることができる。この日記は帯広市教育委員会によって『吉田巖日記』として刊行されており、この時期の日記をみると、大正6年2月18日と19日に次のような記述が残されている。

十八日、曇、午后雪。(中略) 午後一時より六時まで手記中より材料抄出原稿用紙に、アイヌの育児に因める説話をものし、且絵七葉上欄に貼付して稿を了ふ。(以下略)^(註1)

十九日、曇。

昨夜少々雪ふる、さむさゆるむ。

昨日出来し、アイヌの育児に因める説話校正して、九時、隣の川村ハマ、局にゆくのに託して投函せしむ。(以下略)^(註2)

つまり、これによって執筆は2月18日におこなわれ、翌19日に人類学教室あるいは石田宛に発送されたことがわかる。また、付図の枚数も現物資料と合致している。ちなみに、この時期は吉田自身の子どもが生まれた直後であることから、このような育児についての原稿を書いた理由もそのあたりにあるのかもしれない。

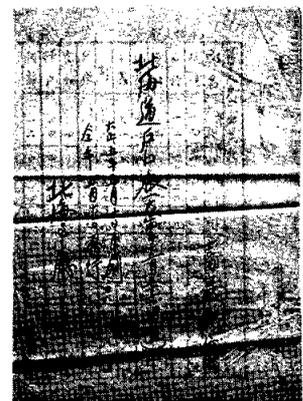
この原稿は、当然人類学雑誌に投稿する目的で書かれ、郵送された訳であるが、しかし、未発表に終わっている。その経緯については憶測の域を出ないが、次のようなことも考えられる。大正6年当時、石田は人類学雑誌の編集(大正4年3月～同14年5月まで発行兼編集者)を担当しているが、しかし、大正6年4月21日の吉田の日記によると、「午後五時、郵着の人類学雑誌第三二巻第三号のこらず通覧す。編輯事務は石田氏にかはりて柴田、松村両氏担当することとなりたる旨承知す。」と記述している^(註3)。もしかすると、この引き継ぎの際に手違いがあったのかもしれない。

いずれにせよ、この原稿は吉田から人類学教室あるいは石田の住まいがあった小石川西丸町に送られたものの、人類学雑誌には未掲載で終わった。その後、吉田の原稿は大正7(1918)年6月号を最後に発表されておらず、吉田に返却されないまま、石田の手元に残ったのである。

〈統計資料〉

続いて、『北海道戸口表』1冊、『北海道廳学事統計一覧』1状であるが、これらは共に北海道編集に関わるもので、大正5(1916)年のアイヌ関連の記述を吉田が墨書したものである。吉田巖謄写とあり、印も付している。

『北海道戸口表』は、北海道廳が大正5年5月11日に発行したものの写しで、大正4年末における北海道内各郡ごとのアイヌ民族の戸口、出生、死亡を表にまとめたものである。もう一方の『北海道廳学事統計一覧』は、「舊土人保護法ニ依り設置シタル小学校」と「舊土人学齡児童」のふたつの表からなっている。なお、前者の資料は、日記によると大正



『北海道戸口表』の写し

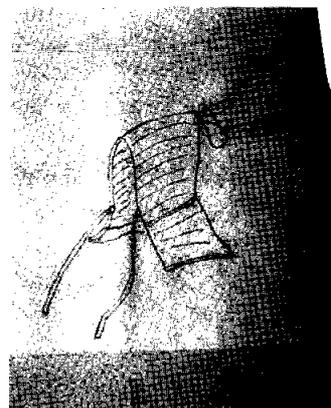
6年1月19日に知人である旭川中学校教頭の磯部精一氏から依頼を受け、同月28日に作製したもので、翌29日にはこれを磯部氏とアイヌ研究社なるところへ郵送している^(註4)。さらに2月11日には人類学会へ送っていることが記述されていることから、未発表原稿と相前後して石田の手に渡ったものであることがわかる^(註5)。

3. 未発表原稿「アイヌの育児に因める説話」

吉 田 巖

一

明治四拾五年拾壹月拾五日日高国沙流郡荷負（ニオイ）村シケレベの雙子の母からその命名を乞はれた。（中略）拾貳月貳拾五日ウテキの族（ウタリ）トノロシキといふ男の家に行くとピリカトクがミルクを呑んで居た。彼の帽子（コンチ）を見ると図の如くである。材料は木綿（1）（2）とも紙片に包んだ括物である。トノロシキの妻は答へた（1）は頭の剃毛で早く捨てれば早く死ぬといふのでかうして母（ハンボ）たちつけておくのよ（2）の臍繩（エハハ）も早く捨てると早く死ぬといふのでかうして置くのよと。妻の母と五歳の女も居列んだ。妻は女兒の名モンチャムを他のよい名に更へたいがあるまいかとだしぬけに言った。このあたりの村落村落（コタンコタン）にはモンコアチ、モニアレ、モンサプテ、アニモなんてあるがどれもモノ、モンが聞き紛れるエモンは「止る」（ヤメロ）といふ意味に通じて呼ぶ度に面白くないからだとの事であった。児等健在せりや。今消息を知らぬ。



二

アイヌの帽子（コンチ）は外見から男女を區別する事が容易である。図のやうに巻目（カンキタイ）に男のは指様の突起物女のは単に竪穴様の裂口を存する制がある。地方によって多少の相異は無論である。この制は大人用のそれにも同様で沙流地方ではよく目撃した。山形地方でナタギリと称するは形式殆同一である。又同地方では帽子（ポーシン）と称するさうだが帽子（コンチ）も元は帽子（ボウシ）と同語の轉訛であるらしい。

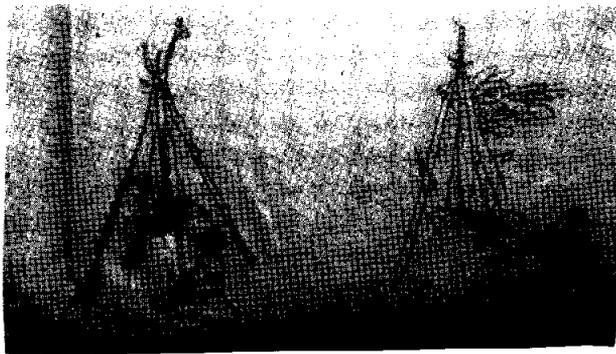
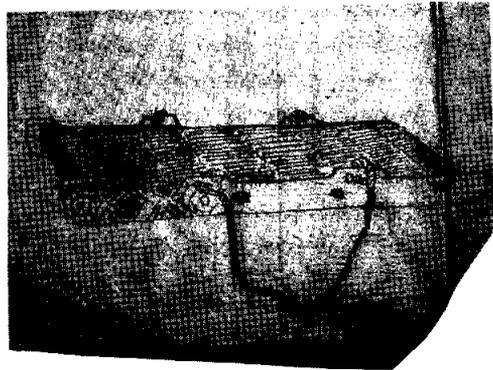


三

図はシンタといってアイヌが乳児を此の上に寝かしてだます揺籃の一種である。明治四拾四年六月參日シケレベのトモネアン女が家で手寫したものである。彫刻せし部分は頭部・左右のシナ繩で樹枝等に釣り又は背負ひなどする。中央に敷いてあるのが草簾である。

翌年七月參日荷負から平取（ピラトリ）への途中二風谷部落（ニブタニコタン）の南方路傍に二人の婦女が畑の除草中圖の如く生木三本を打ちがひに組立て例のシンタに児を釣って子守児が足をなげ出し紐を取ってオロオロ聲にだますに任せつつ作業をする光景を目撃した時はかの揺籃（シンタ）の児が置忘れられたまま時鳥に化成した昔譚に考へ及んで面白き感に打たれた。明治參拾七八年戦後當時

樺太で露国官憲の手に捕へられた獵虎船乗の虻田アイヌ、プトの土産話の中に「樺太アイヌは子供を揺籃（シンタ）に仰に寝かしたまま括つて背負うから丁度背なか合せになるのだ。揺籃（シンタ）は綺麗に拵へてある」とあったがこれは虻田地方は割合開発されてこの俗を見ぬ處から彼を珍しく感じたのである。沙流では揺籃（シンタ）を用ゐない時でも子守児に背なか合せに負はせて母が授乳する風を目撃した。乳児の腹と背との方向は育児衛生上及ぼす結果如何は研究の餘地ある事と考へる。



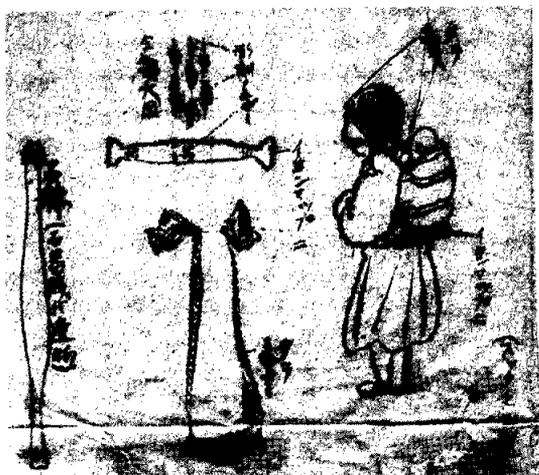
四

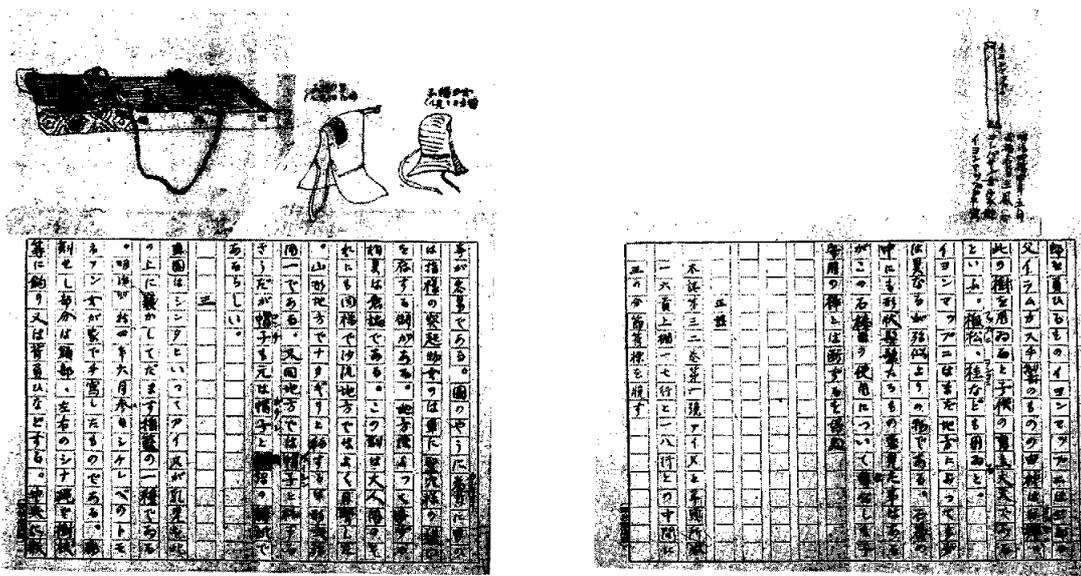
児を揺籃のまま及び背なか合せに負うは今は一般の風習ではない。概して内地人と似よりの仕方ではあるがなほ特に異なるのはタラ（繩）を額に釣ることとイヨンマップニを児の尻の處に當つるとの二つである。これも衛生上攻究せらる可き事と考へる。図は明治四拾四年八月九日沙流郡荷負村ポロサルのスッタ婦参歳の禮太郎を負ひるものイヨンマップニは三郎の父イラムカス手製のものの由材は白櫻（オプケニ）。此の樹を用ゐると子供の育立丈夫であるといふ。椴松（フップニ）、桂（ランコ）なども用ゐると。

イヨンマップニはまだ地方によって多少は異なるが殆似よりの物である。石器の中にも形状髣髴たるものを見たことはあるがこの石棒の使用については必しも子守用の棒とは断ずるを得ぬ。

正誤

本誌第三二卷第一號アイヌと年頭所感一六頁上欄一七行と一八行との中間に三の分節符標を脱す。





未発表原稿の実物

おわりに

以上、石田収蔵の旧蔵資料に含まれていた吉田巖関係の資料について紹介してきた。今回の報告は吉田資料の紹介であり、時代背景や石田と吉田がどのような交友関係にあったのかまでは述べなかった。

現在、帯広市では吉田巖が残した資料について整理と調査が進められ、毎年『吉田巖資料集』の名前で刊行が続けられている。この発刊作業のなか、実は、吉田巖の資料のなかに石田からの手紙類があることがわかっている。

今後は、このような吉田側の資料の調査が進められることによって、当時の人類学の研究の状況や石田と吉田との交友関係などがさらに明らかになるであろうと期待されている。

最後に本稿を執筆するにあたり、柏崎良一氏、帯広市立図書館の吉田真弓氏など、多くの方々にご教示、ご協力をいただいた。末文ながら記して感謝申し上げます。

註

1. 吉田巖著 井上寿編 『吉田巖日記』第九 帯広叢書 第28巻 帯広市教育委員会 1987 P19
2. 同上
3. 同上 P31
4. 同上 P13~14
5. 同上 P18

参考文献

- 吉田巖著 井上寿編 『吉田巖日記』第九 帯広叢書 第28巻 帯広市教育委員会 1987
 十勝大百科事典刊行会編 『十勝大百科事典』 北海道新聞社 1993
 板橋区立郷土資料館編 『石田収蔵 一謎の人類学者の生涯と板橋一』 板橋区立郷土資料館 2000